

# 幼児教育専攻学生の音楽意識調査からみた音楽教育のあり方

—— ピアノ分野から観た考察 ——

窪 田 千恵子

## 序

音楽教育の目的はどのように時代が変わろうとも芸術分野（表現分野）として当然のごとくその本質は変わらないのであるが、感性教育、情操教育を唱えられながらも学校教育の中でのその分野は逆行するように少なくなっている。そしてまた義務教育で学んだはずの基礎学力をほとんど持たない音楽に不慣れな学生が、保育養成校に進みその必要性を説かれ、今まで音楽を受動的立場で楽しんでいた者が創り出す側になり、またその中でも音楽（Ⅰ）のピアノはその楽器の特性上、どの養成校でも諸々の問題をかかえている。独学が出来にくく、長い時間の積み重ねを必要とするこの楽器を、現代の即応性を求める気質の学生がどのようにとらえて受けているか、そしてそれらをどのようにふまえて指導すべきか、を他の指導者達と検討しながら進めてきた結果を調査し、その分析と考察にむけた。

## Ⅰ 調査対象

本学幼児教育専攻学生1・2年を対象にアンケート調査を行い、調査時期は1年生の第1回幼稚園実習が終了した平成2年度2月の年度末に実施した。

回答者数 1年 74人  
2年 85人

図1 (希望就職別)

	幼児教育		企 業		その他		合計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数
1年	58	78	16	21	0	0	74
2年	61	71	22	25	2	2	85

## Ⅱ 調査内容

### 1 音楽に関する意識調査

- A 音楽の必要生について
- B 人間に対する音楽の効果について
- C 好きなジャンルの音楽とその魅力
- D 自分に占める音楽の役割
- E 鑑賞時の状況

### 2 音楽（Ⅰ）ピアノに関する意識調査

- A 入学時のピアノ進捗状況
- B 幼児に対する音楽の必要生とその効果
- C 幼児教育におけるピアノの必要性
- D 短大におけるピアノレッスンの感想

## 1 音楽に関する意識調査

## Ⅲ 調査内容の結果

### A 音楽の必要性について

図2

	1 年		2 年	
	人数 (74人)	%	人数 (85人)	%
必要である	72	97	85	100
必要ない	2	3	0	0

### B 人間に対する音楽の効果について

#### 1年・精神面に効果的である。

- 心の安らぎ、豊かさ (66%)
- ・感性を育てる
- 表現、創造性 (20%)
- ・必要だが解らない (14%)

#### 2年・精神面に効果的である。

- 心の安らぎ (58%)
- ・表現、創造性 (12%)
- ・生活の一部 (5%)

### C 好きなジャンルの音楽

図3-a

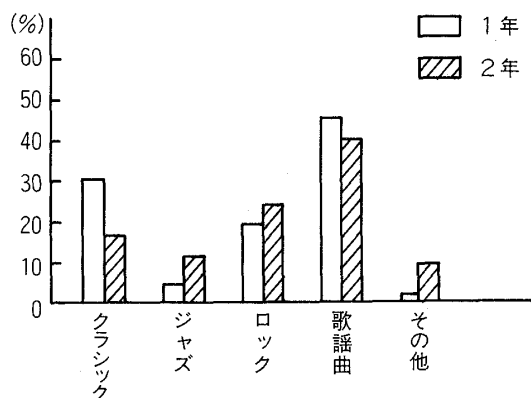


図3-b

	1 年		2 年		計
	人数	%	人数	%	%
クラシック	37	30	23	16	46
ジャズ	5	4	17	11	15
ロック	23	19	36	24	43
歌謡曲	54	45	60	40	85
その他	2	2	14	9	11

複数回答

1 年 121人

2 年 150人

好きなジャンルの魅力

歌謡曲・歌詞に共感

・解りやすい

・一緒に口ずさめる

クラシック・気持が安らぐ

ロック・気持の高揚、発散

ジャズ・気持の高揚、発散

### D 自分に占める音楽の役割

・精神的なもの

安らぎ、人生の友、心の言葉

気分転換 (63%)

・生活の一部 (13%)

・無回答 (18%)

### E 鑑賞時の状況

・その時の気分で

・くつろいだ時

・BGMとして

### IV 調査内容の考察

複数回答については誰もがさまざまな生活環境、人間関係などによるストレスをかかえているので、その時の精神状態で音楽の好みが変わってくるのは当然のことである(図3-a、b)が、音楽に関する知識以前に無意識に音楽を必要とし(図2)さまざまな音楽によって自分の精神状態をコントロールしているのが解る。

Cについて(図3-a、b)

「歌謡曲」に関しては、音楽的素養がなくても、感覚的に自分や自分を取り巻く状況を身近に表現できる範囲のものとして受け入れやすいこの種の音楽が最も多く表われていることは理解できる。

「ロック」に関しては、10代後半の若者がそのエネルギーの情動を大雑把な構成、リズム重視の大きな音量の中で無目的にただかっこよく踊れて楽しく発散し、一時的な逃避のストレス解消にしているのだろう。しかしこれについては年令とともに当然減少するであろう。

「クラシック」に関しては、学生が大人への過渡期の中で成長とともに一過性のエネルギー的な音楽から、無意識のうちに内的なものへ移行し、秩序ある調和のとれた音楽に安らぎを求めはじめていることは、「ロック」と「クラシック」の割合がほぼ同じであることから理解できる。クラシック嗜好においては今後年令とともに増加するであろう。(図3-b)

以上の結果からみて、誰もが音楽を実生活上、潜在的に受け入れて精神コントロールをしているが、本来音楽に感動、興味も薄い学生が音楽に対する受動的立場から、幼児教育を専攻し楽器などを使い音楽を能動的に作り上げることを要求された彼らにとって、また特にピアノに関しては諸々の問題が出されている。その問題の一部である「1対1のプレッシャー」「練習に

追われる毎日」などの心的重圧は研究会などでも取りざたされている。本来の感受性、創造性を育てる音楽教育の目的からかけはなれた問題内容である学生の心的重圧が大であることに考えさせられ検討を進めてきた。

## 2 音楽(I)ピアノに関する意識調査

### A 入学時のピアノ進捗状況

1 年

図 4-a

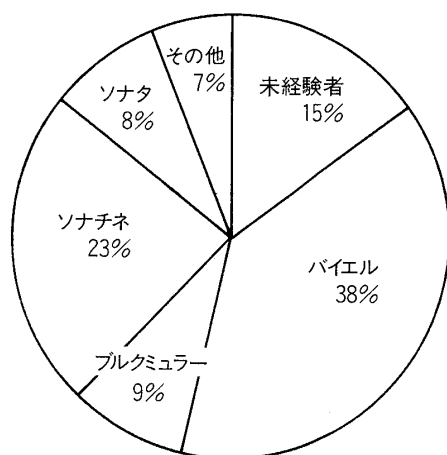


図 4-b

進 度	人数 (74人)	%
未 経 験 者	11	15
バ イ エ ル	28	38
ブルクミュラー	7	9
ソ ナ チ ネ	17	23
ソ ナ タ	6	8
そ の 他	5	7

2 年

図 5-a

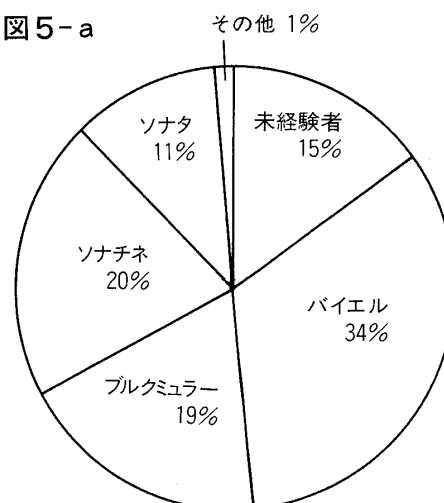


図 5-b

進 度	人数 (85人)	%
未 経 験 者	13	15
バ イ エ ル	29	34
ブルクミュラー	16	19
ソ ナ チ ネ	17	20
ソ ナ タ	9	11
そ の 他	1	1

### B 幼児に対する音楽の必要性とその効果について

図 6

	1 年		2 年	
	人数 (74人)	%	人数 (85人)	%
必要である	72	97	85	100
必要ではない	2	3	0	0

幼児に対する音楽の効果について

1 年・精神面に効果的である。

安らぎ (66%)

・感性を育てる (20%)

表現、創造性、イメージ

・必要だが解らない (14%)

2 年・精神面に効果 (58%)

- ・感性を育てる (12%)
- ・保育生活の一部 (5%)
- ・必要だが解らない (25%)

### C 幼児教育におけるピアノの必要性

図 7

	1 年		2 年	
	人数 (74人)	%	人数 (85人)	%
必要である	74	100	84	99
必要ではない	0	0	1	1

その効果（理由）について

1 年 ピアノによって表現力や自発性ができる。(保育生活の一部) (97%)

2 年 保育生活の一部 (47%)

リズム感養成 (13%)

精神面、情緒面によい (11%)

### D 短大におけるピアノレッスンの感想

㊦ 楽しい

㊧ つまらない

㊨ 嫌い

の三項目で調査

図 8-a

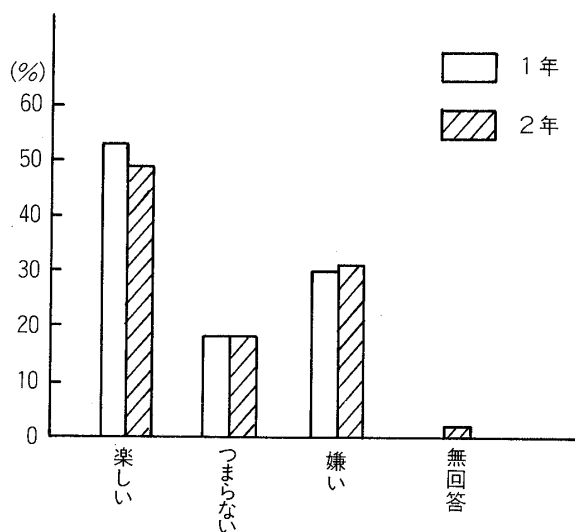


図 8-b

	1 年		2 年	
	人数 (74人)	%	人数 (85人)	%
楽 しい	39	53	42	49
つまらない	13	18	15	18
嫌 い	22	29	26	31
無 回 答	0	0	2	2

D の理由について

㊦ 楽しい

1 年・色々な曲が弾ける感動 (18人)

・先生とグループの和 (13人)

・その他 曲のイメージ説明があり楽しい等 (8人)

2 年・先生とグループの和 (19人)

・色々な曲が弾ける感動 (17人)

・無回答 (6人)

㊧ つまらない

1 年・教本が楽しくない (4人)

・難しい (下手) (2人)

・追いこまれた感じ (2人)

・その他 (2人)

2 年・難しい (下手) (5人)

・好きな曲ではない (3人)

・その他 (3人)

・無回答 (4人)

㊨ 嫌い

1 年・難しい (下手) (11人)

・練習が嫌い (3人)

・緊張する (2人)

・練習時間がない (2人)

・その他 (4人)

2 年・難しい (下手) (11人)

・練習が嫌い (3人)

・練習時間がない (2人)

・その他 (4人)

・無回答 (6人)

## Dの考察

### ア 〈楽しい〉と答えた者について

図4-a・b、図5-a・bに表われているさまざまなレベルの学生（バイエルの学生も子供の時に少しだけ習った者、また短大受験の少し前に習ったのみ、そして他のほとんどの学生も部活動、進学などの理由で中断している。）に対し、指導者が1対1のレッスンによる学生の心理的重圧、個々のレベルや性格などを観察しながら適切なレッスンを行っているからであろう。またさまざまなレベルの学生を1グループに組むと、進んでいる者はたいくつし、初心者は劣等感をもつので三段階のレベルに別け指導にあたっていることも学生にとって学びやすいであろうし、教材以外にもレベルにあった曲を取り入れ応用していることなども楽しめるのであろう。

「楽しい」のもう一つの理由として「グループと先生の和」が掲げられている。

このことに関しては指導者と学生がその音楽に対し、より一対一となって内容の方向づけを行なわねばならないが、この回答から一対感がうかがわれる。またレッスン時にグループ全員を入れることで弾くだけでなく、聴衆の側にもなり客観的立場から話し合えることも励みになっているのであろう。

### イ 〈つまらない〉と答えた者について

教材に関する理由が出されたが、このことについては音楽教育において重要な位置を占める部分である。教材選択として与えた音楽がテクニック（手段）を中心にした単なる指導上の系列で構成されたものを第1目的とした教材より、より感動、興味を引きこむ意欲的、自発的に弾きたいと感じさせるものを与えることがより重要な目的であるので、この理由に関しては指導者側が考慮せねばならない。また教科書の順序に忠実なことよりその学生のレベルや諸々の状況を観ながら応用し進めていくことも必要であろう。

他の理由に「好きな曲が弾きたい」という回答があるが、このことについては学生の単純な表現回答なので具体的な内容は解らないが、幼

児教育に向けられた目的のある範囲内の他の曲のことなのか、ただ一時的な娯楽のための無差別なものなのかを指導者は把握しなければならないだろう。特に初心者においては、一人の選曲の内容の正確さは危ぶまれるので指導者と学生が協同で選曲した方がよいと思われる。また少しづつ経験が積まれ学生自身が幼児教育目的の範囲を自覚した上で自主的な興味で選曲したものを持ち出したら、これは音楽的成長の一つとしてとらえ尊重してよいであろうし、またその選曲が多少のレベル以上のものであっても興味ゆえに自主的に努力しそこから自己の限界を見つけだし、退屈な技術の必要さをも認識し挑戦するであろう。

### ウ 〈嫌い〉と答えた者について

「難しい・下手だから」が「嫌い」の半数を占めているが、この問題に関してはほとんどの学生の読譜力の弱さと練習を積み重ねる努力の不足であると思われる。幼児の場合はリズムと歌による自然発生的身体表現から始まるのであるが、養成校においては音楽に関する知識も同時に教えなければならない。しかし理論的、またはドリル的な方法を第1に進めることより、音楽と密着した方法を共なって進めることの方がより意味深く認識するであろう。

「練習が嫌い」の理由についても上記と同じ読譜力の弱さと練習、積み重ねる努力不足が重荷になっていると思われる。

## 2年後期ピアノ選択希望者

平成3年9月

図9

	2年(H.3)	
	人数 (74人)	%
選択する	67	91
選択しない	7	9

その理由について

選択すると答えた者

・上達したい (25人)

- ・就職に必要 (23人)
- ・ピアノが好き (14人)
- ・その他 (5人)

選択しないと答えた者

- ・企業希望 (2人)
- ・難しい (3人)
- ・部活動 (1人)
- ・その他 (1人)

以上のピアノレッスンに関する考察から、その指導にあたっての姿勢をまとめてみた。

「カリキュラム」に関しては、同じ教材を使っても当然一人づつが違うので、1分野の教科的な細かい規則を遂行することを優先させることや、第1にならざるを得ない細かい（進度曲数や選曲）方法は排除し、保育者としての感性を育てることを目的とした授業内容を行えるゆとりと応用性の必要さを感じ、大筋に指導目標を作成し、また1対1の指導上微妙な人間関係の触れ合いであるので、指導者が学生の学習過程、個性などを観察しそれについて一緒に考えられるゆとりをもって接し応用できることが「1対1のプレッシャー」という授業内容以前の問題から多分に解放されたるであろう。

「教材使用法」については、最初からすべてを遂行するのではなく学習の主題のバランスを考慮した上で、学生と指導者にとってやりやすく楽しめる方法にした方がさまざまな可能性がでてくるであろう。そしてそのゆとりから譜面上のみに終るのでなく譜面を通して訴えるものを見つけだし初めて本質的なところで音楽を通して学生と共に楽しめるのである。

「鑑賞」については教育的内容としてアンケート調査の中では触れていないが、これについては音楽教育の中で客観的授業として重要な部分を占めるものである。この鑑賞については譜面上からの内容把握できにくい初心者、そしてイメージの貧困な現代の学生のためにも大変効果のあるものである。しかしただぼんやりと無目的、受動的な聴き方ではなく、その曲について感じたことの話し合い、気に入ったところ、気

がついたこと、そして初歩的ながらも知識的な分析へと反応しながら聴くことへ導いていけば、意識的にとらえることを知ることになり有意義なものになるであろうからピアノの授業からでも時間の許すかぎりで応用すべきであろう。

また「グループレッスン」も客観的授業の一つであり、弾くことのみでなく聴衆としてグループ相互の批評による自己発見として効果的である。その他にテープレコーダーの使用なども客観的なものとして効果的である。

「表現方法」に関しての発想記号、強弱記号などは文章の区読点であり音楽の主題の発達である。それらの記号は曲の内容の事実とのかかわりを見つけだす材料であって意識の中の一部、生活そのものを表現（代弁）するものである。楽譜や記号などの専門用語や記号法は表現の可能性に限界があるが、音符、譜面の発想記号と自分の弾いている曲のイメージの一体感を得た時、初めてそのものの興味につながり音楽が生きたものとして感じられ感動できるのであり、「*f*のための *f*」「*p*のための *p*」ではないのである。ツェルニーピアノ教本を使用することもよいが、やはりそれは手段として扱われることが多く練習者の興味は薄い。特に初心者、またはそれに近い者にとってはイメージを自然発生的に展開できる表題音楽をとり入れた方が理解しやすく興味をもち積極的、意欲的に創造性をもたせ練習に入りやすい。

教材の1つである童謡の楽譜をどのようにイメージづけているか絵で表現させた。

〈とんぼのめがね〉

図10-a

⑩ とんぼのめがね

軽快に ♩ = 112

新井 隆志 作詩  
平井 廣三郎 作曲

①

① 1 とんぼのめがねはみすいろめがね  
2 とんぼのめがねはあかいろめがね  
3 とんぼのめがねはみすいろめがね

あーおーおーそーをーとーんーだーかーらー  
おーんーとーけーきーもーをーとーんーだーかーらー  
ゆーうーやー

とーんーだーかーらー  
とーんーだーかーらー

①

116

図10-b

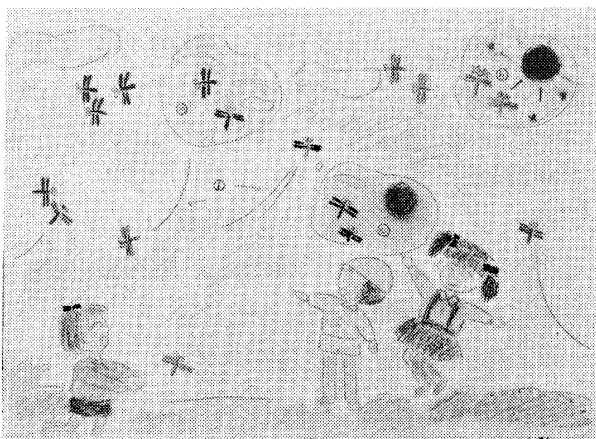


図10-c

〈どんぐりころころ〉

図11-a

⑪ どんぐりころころ

♩ = 60

青木 存義 作詩  
柴田 真 作曲

① ② ③

1 どんぐりころころ  
2 どんぐりころころ  
3 どんぐりころころ

どんぶりこ おいけにはまっ て あたいへん  
ぶこんで しばらくいっ はに あんだが

どうがでてきて こんには ぼーちゃんいっしに あそびましょ  
やっぱりおやまが こいしいと ないではどうを ごまかせた

図11-b

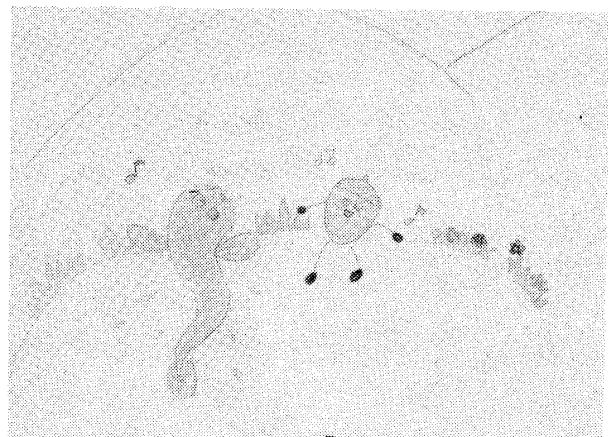
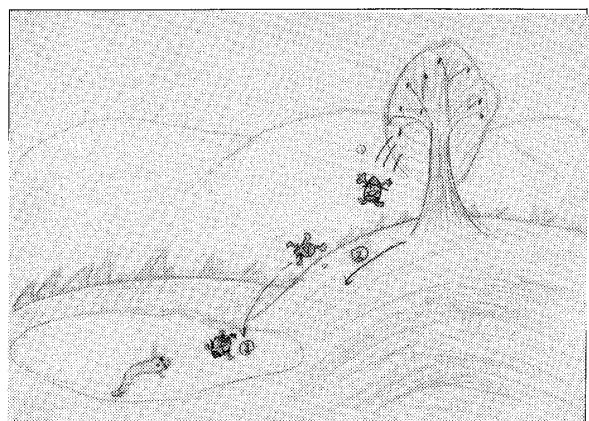


図11-c



# 〈かえるのうた〉

図12-a

⑩ かえるのうた

関根 栄一 作詩  
関根 栄一 作曲

1 かえるのこどもはまだ知らないのこども  
かえるのこどもはまだ知らないのこども

いるはね あれはおとうさん けろけろ ころころ  
だ からね あれはおとうさん けろけろ ころころ

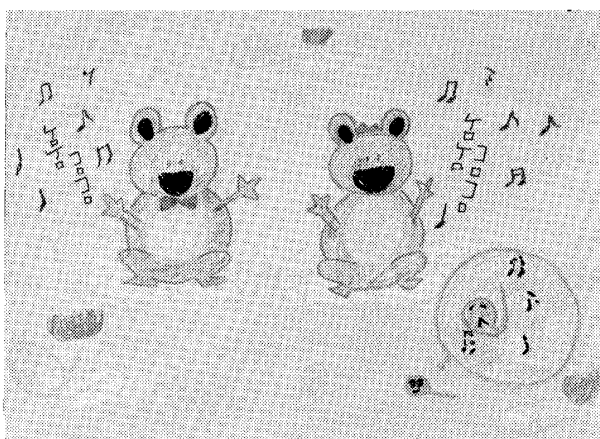
かえるのこどもは  
まだ知らないの  
こどもだからね  
あれはおとうさん  
けろけろ ころころ

かえるのこどもは  
まだ知らないの  
ないてはいるのは  
あれはおとうさん  
けろけろ ころころ

関根 栄一

110

図12-b



日本音楽著作権協会(出)許諾第9172399-101号

## 〈とんぼのめがね〉(図10-a・b)

この学生は表現力豊かで活発であり、ピアノはソナタまで進んでいる。

楽譜からうけるイメージを番号で示しており、また各フレーズの意味を理解している。

1段目と4段目の4小節の<をとんぼが空に向って飛んでいくイメージで表現している。

(①)

歌詞については3番までをその内容のままに描いている。(a・b・c)

色については、「とんぼの羽根」をそれぞれの歌詞に示された色で表わしているが、歌詞には「水色めがね」(1番)になっている。「とんぼ」のガラスのような目が染まる事を想像するまでに至らなかったのか、または歌詞の読みの浅さかもしれない。

3段目には表現記号が付いていない。そのことについて指摘し譜面への意識づけをしたら、「広く高い感じ」と感じとり、「*mf*」と表現した。

4小節目と16小節目の2拍目、*sf* >、については絵の中で表現していない。この記号に対するイメージを質問したら、しばらくして「木の葉に止ったところ」と表現した。

テンポに関しては、感覚もよいので自然に曲の感じをとらえ、メトロノーム記号に近いテンポで弾いた。しかし軽さに欠けたのでそのテクニックを教えたら(紀要8号、P59~60)、「なるほどー」と納得した。

## 〈どんぐりころころ〉 図11-a・b・c

この学生の入学時の進度はバイエルで、また音楽に興味を示さない学生である。

この絵は歌詞を漠然と描いているのみであり、楽譜からイメージをとらえるまでに至っていないので、楽譜から歌詞まで細かく意識づけた。そして再度描いた絵が(図11-c)であり、前奏の2小節のイメージが具体的なとらえ方で描かれている。

最初は16分音符を1音づつ列列していたが、スラーの意味を理解したらテンポも上り、歌えるようになり、楽しんだ。

## 〈かえるのうた〉



この学生の入学時の進度はソナチネである。明るく積極的にピアノに取り組んでいる。絵も楽しく描いているのでピアノを弾かせた。しかし、この曲における前奏4小節、左手のパート、最後の2小節は「かえるの鳴き声」を表していることは理解しているが、技術的な方法を用いなければその演奏表現は難しいので、紀要8号、P60-No45、No60を応用した。描く段階において、「イメージは頭に浮ぶけど、どう描いていいのか解らない。絵の力がないんだなー。」と自覚していた。この自覚は絵に対する研究への発展につながることになるであろう。

以上の絵は一例であるが、ほとんどの者は何の意識もなく、いきなり音符のみをみて弾き始める。しかし、たとえどんな小さな曲であろうと、その曲の題名、音部記号、拍子記号、調号、表現記号、そして最後に速度記号に託された速度に近づけて初めて1つの曲の形が出来るのである。

また歌詞においても最後まで正確に読ませ、その内容を理解しイメージづけさせるべきである。

この様に完全な楽譜の見方が出来るよう導いていかなければならない。

楽譜を説明しながら絵を描かせた後、初級の学生が「なるほどー、こうして見ないから、つまらなかったんだー。」と感想を述べ、その後のこの学生の成長ぶりは目覚しかった。

## まとめ

音楽は無からの自己表現ではなく楽譜という固定されたものからの表現であり、またピアノについては一つの楽器だけを使いながらも絶対音程のとれる総合楽器として「音楽の三要素」の他にさまざまな効果音まで応用できるが、そのために確かに面倒な約束事の多い楽器であるので、どうしても技術的な事を優先し、また技術で停滞しその内容の把握とそれに対する表現という本質的な目的に達する「原点」を忘れてしまっていることが多い。技術は別個に獲得さ

れるものではなくて、音に関しての要求と一緒にしか得られないはずのものである。

音楽は「耳」で考え、「音」で思索することを感じとり、その内取的にとらえるものをどう表現しようかという感覚を育てることであり、技術優先から作られた結果を求めることではないのである。専門化され分科した教育の中で育った弊害もあろうが、特にピアノはその楽器のもつ特性上学習の限られた人数でしか行えないため独奏楽器としてとらえた指導になりやすく、また細かい技術もともなう音楽そのものから孤立しがちになっていることが多分にある。

保育現場での子供達はその発達段階から、リズム、簡単な童謡、簡易楽器を使って表現活動を行っているのだが、その中でピアノは唯一総合楽器として保育者のみが保育生活の一部に、また歌、楽器のバックアップとしてさまざまな方法で使用しているのである。その保育における生活と各音楽分野の関連性を意識下におき指導展開していかなければ本当の表現力を育てる感性教育にはならないであろう。

時代の変化による学生の気質、興味の対象などを把握しながら数年指導法を模索、検討し進めてきたが、単に幼児教育志望という目的だけの必要に迫られて忍耐で受けるのではなく「自然社会」「人間自身」のものとして、創り上げる喜びや成巧感をもたせ、また指導者側も学生が幼児教育希望、企業希望という意識をもたず人間本来のものとして指導していきたい。その意味からも図8-a・bに表わされた「楽しい」の割合、また図9の2年後期の選択希望が、91%という結果は喜ばしい。

便宜上指導という言葉を使ってきたが、本来音楽の授業は音楽について学ぶという場所ではなく、音楽を体験しそこから何かを感じ見つけたさせる場所であり、将来のための経験というより今の体験そのものがプロセス体験として重要であり、その体験が創造性を生みだし、保育現場で求められる「保育者自身の感性」が育つのではないだろうか。

「音楽を生み出すことがどんなに楽しく大切なことか。それはその者のレベルにかかわらず、

やりとげた者のみが解っていることである。その精神満足が音楽教育の一步であり、それは音楽家を育てる教育でなく人間教育である。」

「スチョムリンスキー」音楽の基本姿勢より。

#### 参考文献

- 1) ジェームス・L・マーセル著  
「音楽教育と人間形成」 音楽の友社
- 2) ドミトリ・カバレフスキー著  
カバレフスキーの音楽教育論 「子どもの心を開く」 音楽の友社
- 3) ツェヴェク・エルナー著  
「音楽と子ども」 全音楽譜出版
- 4) 片岡ハルコ著  
「感性と教育」 日本エディタースクール出版
- 5) 大場牧夫著  
新幼稚園教育要領 「領域を考える」 ひかりのくに刊
- 6) 水野和彦著  
「音楽とはなにか」 アポリア出版
- 7) 紀要8号 P. 59~60
- 8) 日本教職員組合編 「音楽教育」 一ツ橋書房